

カワブチゴケ *Cytodontopsis leveillei* (Thér.) P.Rao et Enroth (Syn. *C. obtusifolia* (Nog.) Nog.)

【評価理由】

日本では静岡県以南の主として太平洋側の水系に分布し、川岸の灌木にのみ着生するという生態的に変わった性質をもっている。既知の産地も少ないことなどから、環境指標のセン類として重要である。

【形態】

懸垂性のセン類で川岸の灌木に着生し、茎は不規則に分枝しながら、長く垂れ下がり、ときに 20cm に達することもある。雌雄同株で蒴は茎の途中の短枝の上に多数着く。蒴柄は短く、雌苞葉の中に半ば隠れる。孢子には表面に多くの乳頭がみられる。孢子又はちぎれた茎の断片が水流に流されて分散するものと考えられる。

【分布の概要】

【県内の分布】

新城市（旧鳳来町、旧新城市）などの豊川水系、設楽町に属する天竜川水系などに分布する。

【国内の分布】

静岡県以南、中国までの太平洋側の河川の上流域に分布する（一部、山口県の日本海側水系からも記録されている）。また、調査不足のためと考えられるが、九州、沖縄からは未記録である。

【世界の分布】

ラオス、ボルネオ、ニューギニア等に知られている。

【生育地の環境／生態的特性】

カワブチゴケの名前の通り、川岸の灌木（ヤナギ類、サツキ等）の枝に限って生育する特異な生態を持つセン類である。川岸での着生位置も水面からある高さまでで、それ以上にはみられない。おそらく増水期に上昇する水位の上限までと考えられている。

【現在の生育状況／減少の要因】

県内に知られていた産地のいくつかは、現地調査の結果、河川の改修、川岸に竹林などが広がること等の急激な環境変化により、減少の一途をたどっている。

【保全上の留意点】

生育地は川岸の斜面で、しかも流れが屈曲し、しぶきが上がるような場所に限られる。また、増水期には着生樹自体に水の衝撃が加えられるなど、微妙な条件が満たされている場所と思われる、そのような環境の維持に細心の注意が必要である。

【特記事項】

本種の着生位置（水面からの高さ）が増水期の水位の上限を示すと考えられ、一種の水位計の役目を果たすといった見方もなされている。また、この 20 年程で河岸植生の研究が盛んになっており、維管束植物だけでなく、本種のようなセン類についても、興味深い研究が始まっている。

【関連文献】

高木典雄, 1986. カワブチゴケとその生態. 鳳来寺山自然科学博物館館報, 16: 27-31.



サツキの枝に着いた植物体。
新城市(旧鳳来町), 高木典雄 撮影

県内分布図

